

Pramipexole-induced antecollis in patients with Parkinson's disease: Two cases and Literature review

Mutsumi Iijima, Mikio Osawa, Shinichiro Uchiyama, Kazuo Kitagawa
eNeurologicalSci 2015;1:21-23

ドパミン受容体刺激薬(DA)のプラミペキソール (PPX)による antecollis (首下がり) を呈したパーキンソン病について、既報告 10 例と自験 2 例を含む 12 例を検討した。12 例中、日本人が 11 例、韓国人が 1 例と全例アジア人で、女性が優位であり、Hoehn and Yahr 重症度は 3 度以上が多かった。首下がりの原因はジストニアと考えられた。PPX を中止後、首下がり約 4 週以内に改善した。自験 2 例では、PPX から同力価のロピニロール (ROP) に即時に切り替えたところ、運動症状の悪化なく、首下がり速やかに改善した。PD における首下がりの原因は未だ明確にされていないが、軸方向の筋緊張を調節するドパミン、ノルエピネフリン、セロトニンなどの神経伝達物質の不均衡により生じることが推察されている。PPX は ROP とドパミンおよびセロトニン受容体への親和性が多少異なる。自験例から、DA による首下がり呈する PD 治療の選択肢の一つとして、DA の切替えは有用と考えられた。